ツヴァイク全集

I

# アモク

渡辺健生
関楠一
野村琢理
辻知義
高辻
訳

みすず書房

# アモク

渡辺　健
関　楠生
野村琢一　訳
辻　　理
高辻知義

みすず書房

ツヴァイク全集 1

# アモク

渡辺 健
関 楠生
野村琢一
辻 理
高辻知義
共訳

1973年8月10日 印刷
1973年8月20日 発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 東京(03)814-0131(代表) 振替 東京195132
本文印刷所 理想社印刷所
扉・カバー・表紙印刷所 栗田印刷
口絵印刷所 京美印刷
製本所 鈴木製本所

© 1973 in Japan by Misuzu Shobo
書籍コード 0397-00011-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

# 目次


薄暮の物語……3
女家庭教師……45
燃える秘密……71
ある夏のできごと……153
アモク……169
女と風景……257
訳者あとがき……287
解説……290

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

# 薄暮の物語

渡辺　健　訳

Geschichte in der Dämmerung

部屋のなかが急にこんなに暗くなったのは、風がまた町のうえに雨を吹きはこんできたせいなのだろうか？　いや、そうではない。大気は、夏のこの数日間まれにしかなかったほど、しずかにすみわたっている。時刻がおそくなったのに、わたしたちがそれに気づかなかったのだ。向かいの家の天窓だけが、まだかすかな輝きのなかにほほえみ、棟の上空はすでに金色の煙にかすんでいる。一時間もすれば夜になるだろう。それはすばらしい一時間だ。しだいにおとろえながら影につつまれてゆくこの色合いほど美しく見えるものはない。やがて床から部屋のなかに暗さがたちのぼり、ついには黒い潮が音もなく壁におしよせて、わたしたちを闇のなかにはこんでゆく。そんな時間に、こうして向かいあいにすわり、言葉もなく相手を見つめていると、なれ親しんだ顔が年をとり、見知らぬ遠いものになってゆくかのように思えてならない。まるで、そのような相手を知っていたためしはいちどもなく、広い空間と多くの年月をへだてて見つめあっているかのようなのだ。しかし、きみはいま、沈黙を欲していないと言う。だまっていると、時計が時をたくさんの小さな破片にくだき、息づかいの音が、病人のそれのように静寂のなかで大きくなるのが聞こえて、あまりにも胸苦しくなるからだ、と。わたしは、いまきみになにか話して聞かせなければならないようだ。よろしい。しかしわたしのことではない。というのも、こういうはてしない都会での生活は体験にとぼしい、あるいは、

わたしたちにはそう思える。わたしたちは、なにがほんとうにわたしたちのものなのか、まだわかっていないのだ。わたしは、もともと沈黙しか好まないこの時間にふさわしい話をしようと思う。窓のそとにヴェールのようにただよう、このあたたかい、やわらかい、流れあふれるたそがれの光のようなところが、どこかその話にあればよいと思うのだが。

この話をどうして知ることになったのか、わたしにはわからない。思いだせるのはただ、昼さがりにしばらくここにすわって、ある本を読んでいるうちに、もうろうと夢想にふけり、もしかしたらうとうとまどろみもしながら、その本を落としてしまったということだけだ。すると、突然、ここに人物たちの姿が見えたのだ。彼らは壁にそってすべり、わたしは彼らの言葉を聞き、その生活をのぞき見ることができた。しかし、消えてゆく彼らのあとを目で追おうとしたとき、わたしはもうふたたび目ざめて、ほかにはだれもいなかった。本は足のあいだに落ちていた。わたしはそれをひろいあげ、あの人物たちはなんだったのかと調べてみたが、もうその話はそこに見つからず、まるで、本のページからわたしの手のなかに落ちてしまったかのようであった。あるいは、もともとそこにはなかったのだ。もしかしたら、その話は夢だったのかもしれないし、あるいは、今日、遠い国からわたしたちの町にやってきて、長いことわたしたちをおさえつけていた雨をはこび去った、あの七色の雲のひとつから読みとったものなのかもしれない。それとも、窓の下で手まわしオルガンがメランコリックに鳴らす、あの単純な古い歌から聞きとったのだろうか？　それとも、だれかが何年もまえに話してくれたのだろうか？　わたしにはわからない。そのような話を聞くことはよくあるが、わたしはそれらの中味をしっかりつかまえはせず、たわむれて指のあいだから流れおちるにまかせる。ちょうど、麦の穂や茎の長い花を、通りすがりになでながら、摘みはしないのとおなじように。わたしはそのよ

うな話を、急激で色あざやかな像からはじまって、もっとおだやかな終りにいたるまで夢想するが、それらをしっかりとらえることはない。しかし、きみは今日わたしから話を聞きたがっている。だから、灰色のなかで貧しくなるわたしたちの眼前に、多彩で波乱に富むものが光りかがやくのを見たいというあこがれが、たそがれのせいでわたしたちの心によびおこされるいまこの時間に、そのような話をしようと思う。

どんなふうにはじめたらよいだろうか？　わたしは、ほんのしばらく闇のそとに出なければならないのを感じる。ひとつの情景とひとりの人物。というのも、この奇妙な夢はわたしの心のなかでもそんなふうにはじまるのだ。さあ、もう思いだした。わたしには、ある城館のゆるやかな階段をおりてくるほっそりしたひとりの少年の姿が見える。夜である。おぼろな月しかない夜である。しかしわたしの目は、あかるい鏡にうつしたように、そのしなやかなからだのあらゆる線をつつみこみ、その顔つきまでもくわしく見てとる。少年はなみはずれて美しい。子供らしく梳かした黒髪が、ほとんど高すぎるほどの額になめらかにたれさがり、闇のなかで、昼のあいだ日の光をうけていた空気のぬくもりを手さぐろうとしてまえにひろげた両の手は、とてもきゃしゃで、気品がある。足どりはためらいがちだ。彼は夢みるように、たくさんの丸い木々のざわめく大きな庭園におりてゆく。その庭園をつらぬいて、白い渡り板のように、幅広い道路が一本だけ走り出ている。

わたしは、これらすべてのことがいつ起ったのか、きのうなのか、それとも五十年まえなのか知らない。どこでのことなのかも知らないが、イングランド、あるいはスコットランドでのことにちがいないと思う。というのも、このように高くて、幅広い直方体をなす城館は、わたしの知るかぎり、そこにしかないからだ。それらの城館は、遠くからは砦のようにとりつきがたく威嚇的に見え、親しみなじんではじめて、花咲くあ

かるい庭園をこころよく見せてくれるのである。そう、いまやはっきりとわかる。それはスコットランド北部でのことだ。というのも、夏の夜がこれほどにあかるいのはそこだけだからだ。空はオパールのようにミルク色にかがやき、野はけっして暗くならない。すべては内側からほのかに照らされたように見え、物の影だけが、黒い巨大な鳥のように、あかるい平面におちる。スコットランドだ。ああ、いまやわたしにはそれがはっきり、ほんとうにはっきりわかる。もし努力すれば、この伯爵の居城の名も少年の名も見つかるだろう。いまや、夢の暗い表皮が急速にむけおち、すべてが、思い出ではなくて体験であるかのように、はっきりと感じられる。少年は夏のあいだ、嫁いだ姉のところに客となっている。そして、客をもてなす高貴なイギリスの家のしきたりどおり、彼はひとりではない。晩には、たくさんの狩猟仲間とその夫人たち、さらには何人かの少女たち、身分の高いりっぱな人士たちが宴にあつまり、彼らのあかるく若々しい笑い声が、騒ぎとはならずに、古い城壁にこだましてたわむれる。昼間は、右に左に馬が疾駆し、猟区に犬がかりだされ、向こうの川に、きらめくボートが二つ、三つ。仕事などはない活気が、一日に、こころよくすみやかなリズムをあたえるのである。

しかしいまは夜、宴はおわっている。男たちは広間にすわって、タバコを吸い、トランプをする。夜中まで、あかるい窓から、縁のちらちらとゆれる白い光の円錐が庭園におち、ときには、どっという陽気な笑い声も聞こえる。女たちはもうたいてい自室にあがっているが、ひょっとしたら、ひとり、ふたり、まだ控えの間でおしゃべりをしているかもしれない。だから、夜になると少年はまったくひとりである。男たちに加わることはまだ許されない、あるいは、ほんのしばらくのあいだしか許されないし、女たちのそばにいくのは気がすすまない。彼がドアの把手を動かすと、女たちはふいに声をひそめることがよくあり、彼の聞いて



试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

はならないことを話していたのが感じられるのだ。それにそもそも、彼は女たちといっしょにいるのが好きではない。女たちは子供に聞くようなことを彼にたずね、返事などろくに聞いていない。たくさんのちょっとした手なぐさみに彼を使えるだけ使うにすぎず、あとは、行儀のよい坊や相手のような礼を言う。そこで彼は寝ようと思い、湾曲した階段をすでにのぼっていったのだが、部屋は暑く、そよともせぬにぶいむし暑さがたちこめていた。昼間、窓をしめ忘れたために、日の光が思う存分そこに射しこんで、テーブルを熱く燃やし、ベッドを灼熱させ、壁を圧していたのだ。そしていまなお、そのむし暑い息吹きが、かきたてられたように部屋のすみずみやカーテンからわななきうごくのだ。さてそれから——時間はまだ早かったし、そとでは夏の夜が、白いろうそくのように、しずかに、風もなく、あこがれもなく、ひっそりと光っていた。そこで少年は、城館の高い階段をふたたび庭園へとおりてきたのだ。庭園の暗い円形の上方には、空が後光のようにぼんやりと光り、庭園では、目には見えぬたくさんの花の放つふくよかな香りが、誘うようにひたひたとおしよせる。彼は奇妙な気持になる。なんと言ってよいかわからないだろう、十五歳の心がかき乱されているのだから。しかし彼の唇はふるえる。まるで、夜にむかってなにかを話さずにいられないかのように。あるいはまた、両手をさしあげたり、長いあいだ目をとじたりせずにいられないかのように。そしてまた、話やあいさつのしるしを求める、なにか神秘的で親密なものが、彼と、このやすらいだ夏の夜とのあいだにあるかのように。

少年は、ひらけた幅広い並木道から細い脇道のひとつにゆっくりとはいってゆく。上方高く、銀色にきらめく王冠をつけた木々が抱きあっているように見えるが、下には、夜の闇が重く横たわっている。あたりはひっそりとしずまりかえり、ただ、庭園の静けさ特有のあのなんとも言いようのないひびき、あたかも、ぬ

か雨が草のうえにおちるかのような、あるいは、草の茎が軽い音をたててすれあうかのような、あのさらさらという振動だけが、なにやらわからぬ甘美な憂愁にひたりきって歩をはこぶ少年のほうにそよいでくる。ときおり彼はそっと木に手をふれたり、たちどまって、一瞬きこえるそのひびきに聞き耳をたてたりする。彼は額まぶかに帽子をかぶっている。そこで、それをずらし、血の脈打つあらわなこめかみのあたりに、眠たげな風の手を感じる。

と、彼がいっそう深く闇のなかに歩をはこんだとき、ふいに途方もないことがおこる。背後でかすかに砂利のきしむ音がする。おどろいてふりかえると、もう、ひらひらときらめきながら彼に近づいた、いや、すでに彼のそばにいる大きな白いものしか見えない。そして彼は、強く、しかし荒々しさなどすこしもなく、ひとりの女に抱かれたのを感じて愕然とする。あたたかい、やわらかいからだが、はげしく彼のからだにおしつけられ、片方の手が、わななきながらすばやく彼の髪をなで、その顔をのけぞらせる。彼はよろめきながら、おのが口に、彼の知らぬひらかられた果実を感じる。ふるえながら彼の唇に吸い入る唇を感じる。その顔は、形も見えぬほどまぢかにある。彼もそれを見ようとはしない。戦慄が苦しみのようにからだを打ち、彼は、目をとじ、意志もなく獲物となって、その燃える唇に身をまかせるよりほかない。問いたずねるように、決断もなく、不確かなまま、彼の両腕はこの見知らぬ姿を抱き、ふいにはげしく酔いしれて、その見知らぬからだをぴたりとひきよせる。彼の手はむさぼるように、やわらかい線にそって流れ、休み、そしてふるえながらまた先にすすみ、ますます熱く、激しくなる。ますますひしとせまり、すでにおいかぶさり、よろこばしくも重い荷となって、いまや女のからだのすべての重みが、そりかえる彼の胸にかかる。彼は、なにやら知らず自分の力がぬけ、この重く息づく圧迫の下で流れ去るのを感じ、すでにひざが折れる。彼はな

にも考えない。この女がどんなふうに彼のところへ来たのかも、なんという名前なのかも考えない。ただ目をとじて、芳香にぬれたこの見知らぬ唇から情欲を飲み、酔いしれ、意志もなく、感覚もなく、途方もない情熱のなかにさまよいゆくばかりである。彼は、まるで星々がふいにおちてきたかのように感じる。目のまえがそんなふうにきらきらするのだ。そして、彼のふれるすべてのものが、火花のように、ふるえ、燃える。これらすべてのことがどのくらいつづいたのか、このやわらかい鎖にしばられていたのが何時間なのか、何秒間なのかもわからない。彼は、すべてが悦楽のたたかいのはげしい感情となって燃えあがり、すばらしい眩(くるめ)きのなかによろよろとただよい去るのを感じる。

と、とつぜん、熱い鎖がいっきに断ち切られる。はげしく、ほとんど憤激したように、抱擁の腕が、抱きしめられた彼の胸をつきはなす。見知らぬ姿は立ちあがり、もうすでに、白い光の筋が、あかるく、すばやく、木々のそばを走りぬけ、彼がそれをつかまえようと手をあげるまえに、ふたたび立ち去っている。

だれだったのだろう？　時間はどのくらいたったのだろう？　胸苦しく、呆然としびれ、彼は一本の木をささえに立ちあがる。熱っぽい両のこめかみのあいだに、ゆっくりと冷静な思考が流れもどる。自分の生涯がいっきに千時間も進んだような気がする。女や情熱について雑然と夢みていたことが、とつぜん真実になったというのだろうか？　それとも、ただの夢にすぎなかったのだろうか？　彼はからだにさわり、髪に手をふれてみる。そうだ、脈打つこめかみのあたりがぬれている。ふたりがたおれたときの草の露で、つめたくぬれているのだ。ふたたびすべてが彼の眼前を稲妻のように通りすぎる。彼は唇がふたたび燃えるのを感じ、ぎしぎしいう悦楽の見知らぬ香りを服から吸いこみ、一語一語を思いだそうとつとめる。だが思いだせる言葉はなにもない。

そのとき彼は、彼女がまったくなにも言わなかったことをふいに思いだして、愕然とする。彼の名前すら呼ばなかったのだ。彼が知っているのは、あふれでる女の吐息、せまりくる愉悦、ひきつったように抑えられた悦楽のむせび泣き、乱れた髪の匂い、おしつけられた燃える胸のふくらみ、そして、つややかな女の皮膚だけなのだ。彼女の姿、その息づかい、そしてわななく感情のすべてが彼のものであったのに、愛をもって彼を闇うちしたこの女がだれであったのかは、見当もつかない。彼はいま、自分のおどろきと幸福に名をあたえるために、名前をもとめてつぶやかずにいられない。

すると、たったいま女によってとつぜん味わった途方もないことが、誘うような目で闇のなかからんらんと彼を見つめるこの秘密にくらべると、まずしく、まったくまずしく、とるにたらぬものに思えてくる。あの女はだれだったのだろう？　彼はあらゆる可能性に思いをはせ、この城館にいるすべての女の姿を眼前にあつめる。奇妙だったときのことをすべて思いかえし、女たちとの会話のひとつひとつを記憶のなかから掘りかえし、およそこの謎にかかわりのありそうな五人、六人の女たちのあらゆる微笑を思いおこす。ひょっとしたら、老齢の夫にしばしばはげしい見幕でつっかかる若い伯爵夫人かもしれない。あるいは、妙におだやかでありながら虹色にかがやく目をもった、若い義理の伯母かもしれない。それとも――彼はそう考えてぎくりとした――あの三人姉妹のひとりだろうか？　それは彼の従姉妹たちで、お高くとまってぎすぎすしたところが三人ともよく似ている。いやちがう――この娘たちはみなつめたくて分別くさい人間だ。ここ数年、ひそかな情熱の火が心をえぐり、ゆらゆらと燃えながら夢のなかにおちるようになってからというもの、彼には自分が斥けられた病人のように思えることがよくあった。めまいも欲望も知らぬおちついた人々、あるいはそう見えるすべての人々を、彼はどれほどうらやましく思ったことだろう。目ざめてくる自分の情

熱が、病気かなにかのように不安だった。それがいまは……？　それにしても、だれが、彼女たちすべてのうちのだれが、これほどにあざむくすべを心得ているのだろうか？

執拗な問がゆっくりと彼の血から陶酔をうばいとる。時刻もおそくなって、遊戯室のあかりも消えている。城館でまだおきているのは彼ひとりだ。彼――そしてもしかしたら、だれだかわからぬあのもうひとり。疲れがそっと彼にせまる。これ以上考えたとてなんになろう？　あすになれば、まなざしひとつ、目と目がかわす火花ひとつ、ひそかな握手ひとつで、すべてがわかるにちがいない。夢みるように彼は階段をのぼってゆく。それはおりてきたときとおなじようだが、しかし、かぎりなくちがっている。彼の血はまだかすかにさわぎ、日のほてりをのこしていた部屋も、いまは涼しく澄んでいるように思われる。

翌朝、目をさますと、すでに下では馬がどたどたと足ぶみし、笑い声がきこえ、それにまじって彼の名もきこえてくる。彼はすばやくはねおき――朝食はたべそこなった――、大あわてで衣服をつけ、下へかけおりてゆく。そこではすでに他の人たちがたのしげに彼を迎える。「お寝坊さんね」と、E伯爵夫人が彼に笑いかける。あかるい目からきらめきでる笑いだ。むさぼるようなまなざしが彼女の顔をとらえる。いや、いや、彼女であるはずがない、この笑いは屈託がなさすぎる。「あまい夢を見てたんでしょう」と、若い夫人がからかう。しかしそのきゃしゃなからだは、やせすぎているように思える。彼の問は顔から顔へひらひらとすばやくとびうつる、が、ほほえむような反映の待っている顔はない。

彼らは奥深くへと馬を走らせる。彼はあらゆる声に聞き耳をたて、騎乗のさいに動く女たちのからだのあらゆる線、あらゆる波に視線を走らせ、一挙手一投足をぬすみ見る。昼には食卓で話をしながら、唇のあらゆる香りを、あるいは汗ばんだ髪の匂いを感じようと、まぢかに身をかがめる。しかし彼に合図をあたえて

くれるものはなにひとつなく、熱した彼の思いがあとを追いうるような痕跡は、これっぱかりもない。昼はえんえんと夕べにむかってのびる。本を読もうとしても、行が本のへりをこえて流れおち、ふいに彼を庭園へとつれてゆく。ふたたび夜、あのふしぎな夜で、彼はふたたび見知らぬ女の腕にしばりつけられるのを感じる。そこで彼はふるえる手から本をはなし、池のほうにゆこうと思う。と、われながらおどろいたことに、いつのまにか、彼はあのおなじ場所の砂利道に立っている。夕食のときの彼は熱にうかされたようで、その手は狂い、追われたように休みなくあちらこちらをさぐり、その目はおずおずとまぶたの下にかくれる。他の人たちがついに、ああ、ついに椅子をうしろに引いたとき、彼はやっと幸福になる。そしてもう部屋から庭園に逃げだし、足もとで乳色の霧のようにあわくかがやいて見える白々とした道を、ゆきつもどりつ、そしてまたゆきつもどりつ、なんどとなく往復する。もう広間の灯はともったろうか？　ああ、やっと燃えあがった。二階の暗かった窓もやっといくつかかがやきだす。女たちがひきあげたのだ。もし彼女がくる気なら、あと数分しかかからないだろう。しかしいまや、一分一分が、はげしい待ちどおしさではちきれそうになるまでふくれあがる。そしてふたたびゆきつもどりつ、秘密の網にぐいと引かれたように、ただ右に左にはげしく動くばかりだ。

すると突然、白い姿がすばやく階段をおりてくる。あまりすばやくて、よく見わけることもできない。それは一条の月の光のようにも見えるし、木々のあいだにまよいこんでたなびくヴェールのようにも見える。それが速い風におし流されて、いまや、いまや、彼の腕のなかに溶いる。その腕は、疾走のためにはげしく動悸するこの荒々しいからだを、動物のけづめのように、貪欲に抱きしめる。きのうと同様、またもただの一瞬にして、このあたたかい波がいきなり彼の胸にうちよせ、彼はその甘美な打撃に力のぬけるような思い



试读结束：需要全本请在线购买： www.ert